

P-7 子宮体癌組織のアロマターゼ・エスト
ロンサルファターゼ酵素発現の定量測定

慈恵医大

待木信和, 多田聖郎, 佐々木寛, 田中忠夫

【目的】子宮体癌での estrogen 産生酵素異常は, aromatase (AR) と estrone sulfatase (ES) が報告されている。現在その異常を簡便に検出する遺伝子診断法はない。そこで臨床検体測定可能な測定法の開発をし, 免疫染色との比較を試みた。

【方法】子宮体癌10例の手術材料を凍結保存し, 総RNAを抽出。ARのc-DNAを用いてRT-PCR法により, mRNA発現の強弱を測定した。同時に抗AR polychronal抗体を用い免疫組織染色をおこない, cell analysis systemで染色法の強弱を定量した。また抗ES抗体を用い免疫組織染色の検討も行った。【成績】体癌10例中8例でmRNAの相対的定量ができ, 体癌組織のmRNAの発現には強弱がみられた。免疫組織結果との比較では, 腫瘍間質が強く染色される検体でmRNA発現が強く, また組織学的G3の1例では強いmRNA発現と同時に癌細胞, 間質細胞両者に免疫染色陽性像がみられた。正常組織については, 閉経前15症例で, AR発現はほとんど認められなかったが, 閉経後平均15年経た20症例中15例で, 萎縮内膜上皮細胞の一部にAR陽性像と内膜の肥厚が見られた。一方, 抗ES抗体免疫染色の検討では, 正常内膜上皮細胞がES陽性であり間質細胞は染色されなかった。体癌組織では正常内膜同様癌上皮細胞がES陽性であり, 間質細胞は染色されなかった。しかし正常内膜上皮細胞は均一にES陽性であったが, 癌細胞はES陽性は不均一であった。現在ES遺伝子のRT-PCRによるmRNA定量法を開発中である。【結論】臨床応用可能なAR遺伝子診断法が確立できた。またESは上皮細胞で主に発現し, ARは間質と上皮細胞両方で発現を認めた。

P-8 乳癌術後 Tamoxifen服用婦人の子宮
内膜における estrogen receptor と Progesteron
receptor の発現について

福岡大

蜂須賀 徹, 江本 精, 江口冬樹, 瓦林達比古,
白川光一

【目的】抗 estrogen 剤である tamoxifen (TAM) を長期服用中の婦人には子宮内膜が増加することが報告され, 子宮内膜においては estrogen 作用を示すことが推測されている。そこで我々は乳癌術後 TAM服用婦人の子宮内膜における estrogen receptor (ER) ならびに Progesteron receptor (PR) の発現を免疫組織学的に検討した。【方法】TAM服用患者で子宮内膜生検を試みたのは42例あり, うち25例33標本で十分量の子宮内膜が採取された。その Paraffin block より切片を作製し, autoclave 下に 120°C にて処理を行い ABC 法にて ER と PR を染色した。【成績】TAM は 20mg/日 で 6 か月から 84 か月内服されており, 平均は 20 か月であった。25 例中 9 例は正常月経周期, 10 例で稀発月経, 1 例で無月経, 5 例で閉経後であった。子宮内膜組織像は増殖期内膜 12 例, 分泌期初期から中期 5 例, 後期 3 例, 萎縮内膜 5 例であり, さらに初回生検で萎縮内膜, その後子宮内膜増殖症へと進行した 2 例, 初回生検で分泌期子宮内膜, その後子宮内膜癌が発見された 1 例であった。採取日が日付診と一致したのは 3 例のみであり正常月経周期を示す例でも内分泌異常が推察された。ER の発現は閉経の前後, あるいは増殖期か分泌期かとは無関係に全例で上皮と間質に強く発現していた。PR は閉経前子宮内膜 6 例 (30%), 閉経後子宮内膜 5 例 (100%) に発現していた。子宮内膜増殖症 2 例, 子宮内膜癌 1 例については ER と PR は共に発現していた。【結論】TAM は核内の ER の補充を阻害することにより receptor が減少し抗 estrogen 作用を示すと推測されているが, 今回の検討では子宮内膜では閉経ならびに月経周期とは無関係に ER は強く発現しており乳腺組織とは異なった臓器特異性が示唆された。